

日・中両国の略字について：その統一の限界をさぐる

著者	有賀 憲三
雑誌名	ことばの研究
巻	1
ページ	357-370
発行年	1959-02
シリーズ	国立国語研究所論集；[1]
URL	http://doi.org/10.15084/00001723

日・中両国の略字について

——その統一の限界をさぐる——

有 賀 憲 三

両国の略字

1. 共通しているもの
2. やや、ちがっているもの
3. かなり、ちがっているもの
4. 日本だけで用いるもの
5. 中国だけで用いるもの

当用漢字と常用字とのあり方

中国の略し方と画数 (参考)

むすび

ことわり

ここに用いた「略字」の用語は便宜的なもので、日本では当用漢字の新字体中、旧字と異なる字形のもの（ただし、点画の向きが変わったとか、一部の画の伸び縮みや交錯接触などが変わったとかいう程度のもので、画数は変わっても、シンニューやクサカンムリのある字などは一応除いた。）と中国においては、簡体字をさすことを前もっておことわりする。

まえがき

社会党訪ソ使節団の一行が、昭和32年3月、北京に立ち寄った際、周恩来首相から片山団長に、「漢字の略字を日・中両国で共通のものにするよう話し合ってはどうか」との提案があったということが、当時の新聞に出ていた。また、同年12月、中国紅十字会会長の李徳全女史一行が、日本に来られたときにも、記者会見の席で、廖承志顧問から「漢字制限にとまって、略字の一致をできるだけ図ることが、両国文化の発展提携に重要なことだ。」と話されたように聞いている。こんな話のものであるのも、日本のきめた当用漢字の新字体と、中国で公布された簡体字との中には、すでに一致しているのが多数に及んでいるし、ま

た、わずかに一点一画が違っているだけのものも相当数見られるからであろう。これらは双方の話し合いによって、なんとか一致が図れそうに思われる。はたして、どの程度の一致が図られるものか、到底一致のできそうもないのはどんな文字か、などのことは、実際文字に当たってくわしく調べて見なければわからない。その結果一致のできるのは全体の一部分で、両国のために大した利益もないということになれば、あえて話し合うにも及ばないことで、両国はそれぞれ漢字制限と、それに伴う漢字簡化の道を、お互い参考にしながら進めて行けば、それでもいいわけである。何はともあれ、一字一字の調査を行なっていくことにしたのである。そこで幸い手元にある「国立国語研究所資料室」の調査（村尾所員調成）に成る「日本当用漢字・中国常用字の対照表」によって、調べた結果は次の通りである。

1 共通しているもの

医臥会回覚学飢旧区駆繼献号国参惨蚕辞湿寿証条状尽随数声双壮装属台体担
胆断虫昼銛鉄点当党独麦蜜宝万余誉来乱礼恋炉楼湾（五十音順）
の57字は中国の簡体字と全く一致しているのである。

この57字は当用漢字の1850字（教育漢字881、別表外字969）と常用字2000字（一等字1010、二等字490、補充字500）との中で、それぞれ簡易化された略字中まったく同一のものである。今この略字の各級にわたる所属状態をみると、

（日）教育 33字、別表外 24字、計57字

（中）一等 38字、二等 11字、補充 8字 計57字

で、教育漢字中の略字33字は、そのうち29字までが、常用字中の一等字にある略字と共通し、残り3字は二等字、1字は補充字にあるものと共通である。また別表外字中24字の略字はそのうち9字までが一等字、残り8字は二等字、7字は補充字にあるものと共通である。

次にわかりやすくするために文字で示すと、

(1) a (日) 教育漢字内 $\xleftrightarrow{29\text{字}}$ (中) 一等字内

医会回覚学旧区号国参惨条状数声台体断虫鉄点当党独麦万余来礼

b (日) 教育漢字内 $\xleftrightarrow{3\text{字}}$ (中) 二等字内

蚕 証 属

c(日) 教育漢字内 $\xleftarrow{1\text{字}}$ (中) 補充字内

昼

(2)a(日) 別表外字内 $\xleftarrow{9\text{字}}$ (中) 一等字内

尽随壮双装担宝乱楼

b(日) 別表外字内 $\xleftarrow{8\text{字}}$ (中) 二等字内

飢継猷惨湿炉湾胆

c(日) 別表外字内 $\xleftarrow{7\text{字}}$ (中) 補充字内

欧驅寿銕蛮營恋

付記 なお別表外字中、柩窃墮触勵など(計13字)の略字も、中国の简体字と一致しているが、これらはいずれも常用字外の文字であるために省くことにした。

以上両国がそれぞれ漢字制限の主旨から制定された当用・常用の漢字1850字と2000字の中、共通する略字はどんな文字であるかということと、その略字の所属関係とを知ることができた。このことは、すこぶる重要なことで、同一の漢字を使用しながら、言葉の違いから、一方では初歩用、また一方では高級用と位置づけられるのである。

上にあげた日・中共通の略字は、話し合いの上で決めたものではなく、いわばたまたま一致を見たものである。これは別にふしぎなことではなく、もともと同じ漢字を簡易化するために、古く用いられた簡易な形をとって来たり、また筆写体として社会に広く用いられていた俗体を正字としたもので、そのほとんどが落ちつくところに落ちついたというべきものである。一致している略字が57字もあったということは、都合のよいことで、漢字の簡化によって、日中同文の線はまだくずれはしないという多少の安心感とは与えられる。がしかし、さらによく検討を進めて見ると、漢字簡化の問題は決してゆるがせにできない重大なものをはらんでいるように思われる。同文同種といわれている同文は名のみで、その実態はすでにくずれかけているともいえるのである。一致している略字の数量などは、日本の略字の全数(約317字)から見てもほんの一部に過ぎない。まして積極的に簡化を行なった中国の略字から見ると、言うに足りないほどの小数であることがわかる。その他一点一画しかちがっていないのや、

日・中各一方的の略字などについて見ていくと、両国の話し合いで、略字をできるだけ共通のものにしたらということは、むずかしい問題のように思われる。かりに似寄りのものを話し合いによって、一致させ得たところで、現行略字の全量からみると、ほんの一小部分に過ぎない。しかし一部分でも略字の一致ができれば、それに越したことはあるまい。とにかく両国略字の相互関係について、以下列記して見よう。

2. やや、ちがっているもの

まず日本のとややちがう略字の内、おもなものをあげて見ると、(カッコ内は旧字体)

(日本)	(中国)	(日本)	(中国)
辺(邊)	边	変(變)	变
対(對)	对	団(團)	团
労(勞)	劳	濟(濟)	济
画(畫)	画	剂(劑)	剂
挙(舉)	举	氣(氣)	气
庁(廳)	厅	称(稱)	称
処(處)	处	実(實)	实
榮(榮)	荣	圧(壓)	压
營(營)	营	單(單)	单
与(與)	与	写(寫)	写

以上20字は日・中どちらかで改めれば、容易に一致を見ることができよう。

* この部類の略字は上記20字のほかになお26字をあげることができる。

3. かなり、ちがっているもの

日・中間で相当なひらきのある略字としては、

(日)	(中)	(日)	(中)	(日)	(中)	(日)	(中)
亜	亚	遅	迟	価	价	楽	乐
児	儿	漠	汉	歴	历	帰	归
暈	迭	発	发	聴	听	戦	战

* 以上の12字は、例を示したもので、この部に属する略字は対照表と漢字簡化表について調べたところによっても、計93字にも達している。

4. 日本だけで用いるもの

日本だけに限られている略字についていえば、

- a 教育漢字として用いられる「仏」は、中国では略字化さないで、旧体の「佛」(補充)をそのまま使用している。
- b 教育漢字の「糸」も中国では旧体「絲」(一等)を用いている。
- c 同様に仮屯円届欠拝予孃桜乘剩醉粹碎なども日本だけに限られ、中国では旧体のまま用いられている。(これに属するもの約 109 字)

* 日本よりも漢字簡化には積極的の中国が、これらの字に限り、画の多い旧体を守っている理由に不審が持たれる。

5. 中国だけで用いるもの

中国だけに限られたものを「漢字簡化表」について、当用漢字内のものだけを調べたところ、167 字の多数にも及んでいる。それを大別して見ると、

- a 旧字の部首の一部を略したもの。

报(報) 宾(賓) 扑(撲) 奋(奮) 妇(婦) 敌(敵) 标(標) 补(補)
范(範) 协(協) 达(達) 种(種) 夺(奪) 际(際) 难(難) 确(確)
选(選) 热(熱) 动(動) 态(態)……(以下略)

- b 部首の一部を略した程度の簡化でなく、旧体とはちがった形の略字13字をあげると、

备(備) 几(幾) 丑(醜) 头(頭) 响(響) 冲(衝) 护(護) 只(隻)
义(義) 后(後) 众(衆) 叶(葉) 谷(穀)……(以下略)

* このような略字が新聞・雑誌・教科書その他の文書などに出てくると、同文どころか意味がとれなくなって、漢字を見れば大体意味の判断がつくなどといっていることがいられない。

* 「众」などは人が集っているところから、「衆」だろうと、およその判断もつくが、「叶」になると「葉」の略字とは思いつかないことである。

以上漢字簡化表について調べたところによっても、当用漢字内の漢字で簡略化された略字が 209 字にも達していることがわかる。その他当用漢字外の漢字で略字化されたものを合せると、おびただしい数になり、これを日本の当用漢

字の新字体（略字）計 317 字と比較すれば、非常なひらきがあって、統一どころか、一致しようにもほんの一部のことに限られる。すでに行なわれている略字を今さら改めるとなると、非常な混乱をもたらすことと思われる。このことは当用漢字が、実施以来すでに10年を経た今日、公用文書は勿論、多くの新聞・雑誌上で実践されているのかかわらず、当用漢字による学校教育を受けなかった一般大衆には、いまだに使用しきれない状態を見てもわかるとおり、うかつに中味の改変はできないものであろう。漢字選定とちがって略字は能率上から見ても、案外大衆には受け入れられやすく、複雑な漢字からの解放を望んでいる人は相当多かろうと思われる。随って、漢字簡化の問題は、今後とも推進されなければならない重要な問題である。殊にローマ字表音化を目指す中国にとっては、緊急の問題であるが、日本においても、今の新字体の略字程度にあまじてよいものとは思われない。日本独自の立場からも当用漢字内の略字の整理・推進が要望される。両国略字の統一は調査の結果、前に述べたように困難ではあるが、両国今後の推移を知るために話し合っていくことは望ましいことである。どうして略字の一致は無理かと問われれば、その答は至極簡単である。それには略字以前のものに還元して考えれば明白である。漢字は同一であっても日本が当用漢字として選んだ1850字と、中国が選んだ常用字2000字との間には、大きな食い違いがあることである。略字一致の限度やそれから受ける効果の多少は、当用漢字と常用字とを比較対照することによって、ほぼ見当がつくように思われる。よって、次に双方の略字を生んだ母体である当用漢字と常用字とのあり方を述べて見よう。

当用漢字と常用字のあり方

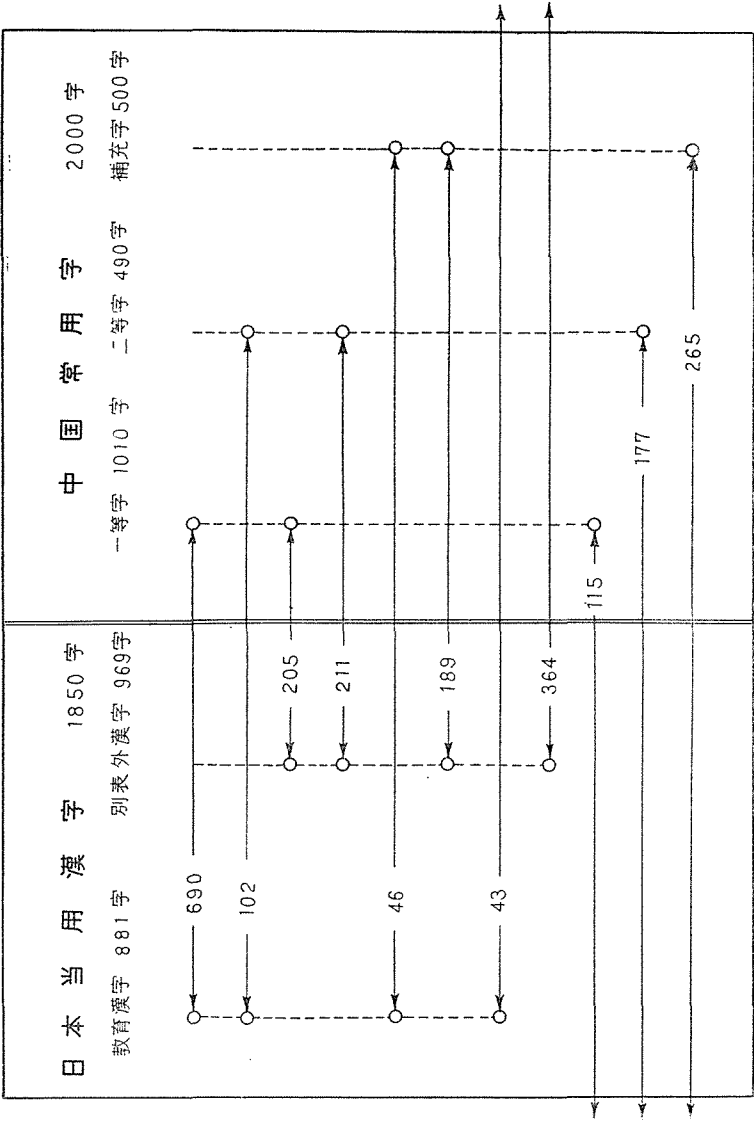
（第1表）

日本特用字	407	}	当用漢字	1850 (1946年決定公布)
共通字	1443		常用字	2000 (1952年公布)
中国特用字	557			

上の表は、日中両国が、それぞれ選んだ当(常)用漢字、計3850字の中に、共

通の漢字が1443字あることと、それを除いた残り 964 字(日 407 字と中 557 字)は、全部両国それぞれの特用漢字ともいうべき文字で、お互いに相手のない食い違った文字であることを示したものである。

(第2表)



* ことわり、「当用漢字・常用字対照表」には、日本の効・卓・嘆・煙・綿・閑・飢・鋪は、中国の效・桌・歎・烟・棉・閒・饑・鋪と同意の文字なのに別扱いになっているが、そのままに計算した。

上の第2表によって、日本の当用漢字1850字が、教育漢字 881 字と別表外の漢字969字とから成っているのに対し、中国の常用字2000字は、一等字(仮りに日本の教育漢字に相当するものと見なす) 1010字と、二等字すなわち日本の別表外の漢字に当る490字と、さらに500字の補充字から成っていることを示す。いま選ばれた漢字の数を比較対照して見るに、まず、教育漢字中の 690 字は、一等字のうちにあげられていることがわかる。換言すれば、教育漢字と一等字の中には、共通の漢字が 690 字あるということである。次に残りの 102 字は二等字の中に、46字は補充字の中に、それぞれ出ているが、最後の残り43字は常用字の中には見だすことができない。

以上の比較対照によって、日本の教育漢字 881 字が、中国常用字の三段階のうち、どの段階に置かれているかを知ることができる。すなわち 690 字は一等の段階に、102字は二等に、46字は補充字中にそれぞれ配分されているが、最後の43字に至っては、常用字中に影さえ見られないということは、この43字が日本では、初等科用のやさしい漢字であるのに、中国では常用でなく、必要性の低い漢字であることがわかる。ある漢字になると、全然無用のものさえもある。ここに等しく漢字使用国であるのに、両国語の違いによって、同じ漢字でありながら、その使用法も異なり、時には意味さえ異にするものが生じたのである。このことは興味のある問題で、日中は同文同種の国だなどと簡単に片づけられないことを物語るものである。次にその興味ある日本特用文字をあげてみよう。

〔教育漢字から〕

仕俵働億効^{*}卒[△]后君坂夕孝寺屈岩役憲昭曜株構欲泳漁犬町畑番[△]皇祭絹綿^{*}絵聖諸予貝貯
賃赤返逆郡[△]陸[△]鳴

注. 1. 「効」「綿」は常用字(一等)にある「效」「棉」とを共通字としないで別扱いにした。

2. 后・皇・陸・昭などが常用字中にないのは、当然であるが働・祭などの出していないのは選字の不備か？。

次に別表外の漢字について、常用字との関係を見るに、205 字は一等字内にあり、また 211 字は二等字内に、しかして 189 字は、一・二等を飛び越して補

充字の中に出ているという状態である。なお残りの 364 字に至っては、ついに常用字中どこにも姿を見せていないのである。以上の事実を総括して見ると、前にも述べたが、当用漢字 1850 字中 1443 字までは、とにかく中国常用字の中にも出ているが、残りの 407 字は全然中国の常用字中には取り上げられていない、日本特用の漢字であることがわかる。

今度は逆に、常用字内の漢字で、全然当用漢字に取り上げられていないのを調べて見ると、一等字中の 115 字と、二等字中の 177 字、計 292 字は、当用漢字としては選ばれていないし、また補充字の半数以上にのぼる 265 字が当用漢字には顔を出していない。これを見ても、中国ではこれらの漢字が、常用字と目されているのに、日本では当用字でないことがわかる。要するに両国お互いが、日常生活に必要と考えられる漢字に、かなりの食い違いのあることを知ることが、略字一致の必要と、その可能性の有無を決定する重要なカギとなるかとも考えられる。もし日・中話し合いによって多数の略字を一致し得ると仮定しても、それから受ける相互の利益を判定する資料にもなろうかと思ひ、かくは当用・常用の漢字について比較対照表を手がかりとして、その相互関係をあきらかにしたものである。

当用あるいは常用として選ばれた漢字

漢字制限の意図から選ばれた当用漢字なり常用漢字なりは、その名のとおりに日常の用語を表記する上に最も必要であって、これぐらいの漢字は、現段階にあって是非とも無くては困るという考えから、厳選されたものにほかならない。それでも実際に使用して見ると、いくつかの選びちがいが出てくることはやむを得ないことである。このことは現に日本の当用漢字においても 28 字の出し入れが、まだ正式の決定とはならないで、目下試用中にあることでわかる。当用の名が示すように現段階における使用漢字であって、なお修正増減の余地を存するものであろう。ある人は 1850 字は少な過ぎる。よろしく倍加すべきであるといい、またある人は、半減すべきだともいっている。やがては表音文字に変るべきもので、漢字制限もそれに到る過渡的の処置であって、漢字は早晚廃止されなければならないと極言する声さえも聞かれる。かくして漢字に代る文

字はカナかローマ字か、あるいは新文字か、とにかく文化の進展に伴って漢字の表音化が叫ばれ、中国のローマ字化にも刺激されて、国語国字の問題が議会にもとり上げられるに到ったのである。それはさておき、国字改革の第一歩として、日本に当用漢字、中国に常用漢字が制定されたことは、過渡期の処置としても当然のことであった。しかして選定された1850字と2000字とは日常生活に必要な漢字であるところから、その大多数は一致しているだろうぐらいに、だれしも常識的に考えられ易いが、さて比較対照して見ると、両国語のちがいが、日本にはあるが中国にはない字、また中国のみにあって日本にはない、日・中各一方的の漢字が相当に多いことに驚くのである。このことは両国略字の問題にも関連することがらであるから、以下文字に触れて述べてみたい。

1. 日本側にあって中国側でない漢字

当用漢字のうちの教育漢字の多くは、常用漢字中の一等字若しくは二等字、まれには補充字に出ているが、意外なことは、前に述べたように、そのうち43字はどこにも出ていないことであった。別表外においては364字までが常用字に含まれていないことを知ったわけであるが、ここではいちいち文字をあげての説明は省略する。要するに日本では用途の広い、きわめて普通に用いられる漢字であっても、国語を異にし、国情習慣のちがう中国では、特殊の漢字であったり、または同一の事物にも別の漢字であらわすわけで、たとえば日本での「犬」は中国では「狗」が普通である。「俵」は米産地の日本では重要な文字であるが、中国では用のない文字。数字の「億」は「万万」で表わすなど、日常用漢字の完全統一は無理な注文である。

2. 中国側にあって日本側でない漢字

今度は逆に、中国側から見た場合、中国の常用字で、日本の当用漢字には全然姿を見せない漢字を、数字の上でなく、実際の文字について見てみよう。前にも述べた通り、一等字に115字、二等字に177字、補充字に265字合計557字の多数が日本の当用漢字に出ていない状態である。それらの漢字はどのような漢字かということを、まず一等字内の115字のうちからおもなものをあげてみよう。

你佔們划另吧呀呢嗎嘴媽孩怎儘找槍牙猪碰穿站蛋賤麼……(計115字)

上記のうちのある漢字は、日本語にはほとんど見当らないものであって、中国語を学んだ人でないと、どんな意味か判断のつかないものもあろう。これらの文字は中国語の中では、一字として使われるものもあるが、多くは他の漢字と結合した熟語となって用いられるものである。たとえば「你」は「お前」「あなた」を意味し、「們」は単独としては用いないで、「你」と結合して「你們」「あなたがた」の意味となる。「怎」は「麼」と合せて「怎麼」「どんな・どのように」となるし、「麼」が言葉の末尾にきた時は、疑問詞の「か」を表わすことになるなど、漢字は同じでも、古い漢文とは異なり、現代語では全く外国語に等しい。漢字は中国から伝来したものであるから、漢字の拾い読みでもおよその意味は通じるだろうぐらいに考えたら、大間違いであろう。また上記の漢字中当用外の漢字ではあるが、日本で使用するところの「嘴」「槍」「牙」「猪」「穿」「賤」を「くちばし」「やり」「きば」「いのしし」「うがつ」「いやしい」などと日本流に解すると、とんでもない笑話のたねになるおそれがある。

次いで、二等字中の 177 字のうち、おもなものだけをあげると

什仍仗伙估吵咱哈喂垮奶她它抬搞擺朵毕瞎秧糕要憊髒……(計 177 字)

初歩段階の一等字に比べて、二等字中の漢字 177 字は多画の文字も多く、意味の判断のつかないのが多いことがわかる。当然日本の当用漢字には出ていないこともうなずかれる。

更に補充字中の 265 字も、紙面の都合上、主なものととどめたい。

倘凳匀勾匯哪唉售夥霰截抖拮搭搯玖皂盼笨罩踢繫飢……(計 265 字)

この部に属するものは、さきにあげた一等字及び二等字のものよりも、はるかに日本人には縁遠い画の多い字で、日本当用漢字とは全然おもむきを異にしたものである。

以上三段階にわたってあげて来た計 557 字の漢字を見ても、両国選定の日常用漢字には、大きな開きのあることがわかる。これと前述の、当用漢字にあって中国の常用字にはない 407 字の漢字とを合せ考える時、はじめて日中両国の当用・常用漢字の種類や性格がつかみ得るように思われる。しかし中国の常用字 2000 は識字運動に伴う最低限度のもので、知識層一般に対する常用字は

もっともっと多いものと推定される。その多数の常用字のためにも、漢字簡化の必要が起ったわけであろう。

(参考) 中国の略し方

大体三通りに分けることができる。

I 字形の簡略化

1. 偏だけを残したもの

殺(杀) 郷(乡) 親(亲) 雜(杂) 離(离) 類(类) 獸(兽) 競(竞) 顯(显)

2. 旁だけを残したもの

捨(舍) 務(务) 誇(夸) 像(象) 録(录) 招(召)

3. 上部を残したもの

飛(飞) 氣(气) 産(产) 塗(涂) 準(准) 業(业) 製(制) 広(广) 築(筑)
麗(丽)

4. 下部を残したもの

児(儿) 雲(云) 電(电) 髮(发) 開(开) 関(关)

5. 中部を省いたもの

尋(寻) 虜(虏) 寧(宁) 奪(夺) 慮(虑) 奮(奋)

6. ある一部を残したもの

習(习) 従(从) 豊(丰) 婦(妇) 濁(浊)

II 発音から来たもの

1. 闘(斗) 幾(几) 穀(谷) 乾(干)

2. 華(华) 憲(宪) 歴(历) 達(达) 辺(边)

III 意味から考案したもの

陽(阳) 陰(阴) 隊(队) 衆(众) 孫(孙)

その他古文字を復活させたものや、民間で慣用されたものや、草書を楷書化したものもある。(例、略)

旧体と略体との画数比較

やや極端な例になるが、新字体の敵は16画で旧字の20画にくらべると4画減となっている。中国の略字^①となると7画ですむ。同様に靈は旧字の24画が15

画で簡単になったが、中国の略字灵はわずかに7画で足りる。それにしても字形がはじめのうちは不快な符号のように感じるが、これも慣れである。このことは新字体がきめられた当時、庁や団や庄などはいくら能率的でも漢字として不愉快に感じたが、今日ではさほど奇怪に感じなくなったことでもわかる。9画の飛は日本では簡化しないが中国では3画の飞を用いている。漢字の形からいうとすわりの悪い、書きかけのように思えるが、これも慣れて見ればいかにも意を表わした形のようにも思われる。

次に中国の簡体字第一表、第二表計515字について、一字平均の画数を調べた結果、旧体（7画～32画）の平均画数16.05画に対し略体（2画～18画）では8.14画となり、ほとんど半分の画数になっていることを知った。平均画数12画とか聞く日本新字体の簡化前進が望まれる。

むすび

すでに実施されている両国の略字について比較調査してただけでも、略字の統一はむずかしいように思われる。

さらに略字の母体となる当用漢字と常用字にもとづいて比較対照して見た結果、統一は不可能に近いことを知った。それは選ばれた両国漢字中の食い違いから来ることで、当然なことである。したがって簡化された略字にも、それに伴う食い違いをきたしたわけである。それを広く統一しようとすることは無理な相談でもあり、また無意味なことにも思われる。

日本で現在必要とする略字は、あくまでも当用漢字内のものに限られている。いま中国と協定するにしても、略字統一の範囲はおのずから決まっている。この範囲内の協定さえ相当の困難が予想される。もし幸いにある程度の一致ができたにしても、すでに行われている略字を中途から改めるということは、非常な混乱を招くことで、実行はおぼつかない。不幸にして、統一の話し合いが立ち消えに終るとしても、両国の漢字制限に伴う略字の研究とその制定実施は一層推進されるであろう。今後、両国お互いが常に協調を図り、その長所を取り入れたり、参考にしたたりするためにも、話し合って行くことは必要なことで、お互いが国語国字問題の成り行きを知り合って行くことは重要である。共

通の略字が一字でも増して行くことはもとより望ましいことである。しかし、そのことだけで、お互いの国語が理解されるものではない。両国文化の交流には是非とも外国語として、お互いの国語に通じ合うことであろう。